

快哉の所為

澤田雅弘
SAWADA Masahiro

ここ十年くらいになるだろうか、毎年、本研究所在本学の書道関係教員の揮毫作を月ごとに掲載したカレンダーを発行している。二

〇二一年度版は従来の壁掛けから机上用に変更したことから、ハガキ大の作でも可との依頼を受け、机上の書類の山やパソコンを片隅に寄せて、美濃判の毛氈を敷き、候補にした秦隸風の二字と、行書十字の二種をそれぞれ二枚試みたうえで、カレンダーには秦隸で行くことにした。その完成後、残り墨がわずかにあったことから、行書の方を書いて使い切ろうと思った。制作の目的もなければ意図もない。愉快を体現しているだけで、快哉というのが当たろうかと思う。

快哉といえ、近年の揮毫は半ばこれに当たる。若いころは現代にフィットする造形や構図に奔ったこともあったが、いまはそうした狙いはほぼ薄らいだ。とはいえ、出品先は念頭におくし、学生に向けて発したい文言を選ぶので、目的は明確だが、作品の意図はほ

ぼ頭はない。写したい字句の文意を頭において、ざっくりとボールペンなどでラフを書きながら、紙の寸法と書体を決めるが、それ以外の制作意図などは湧かない。しかも、筆を執ってからはただ快哉を求めている。

そもそもこのページは作品論の枠であるから、制作意図やその意図を達成するためにどのような方法を講じたかなどを論じて、制作の可能性の拡大や、意図と結果の関係性の論証などに寄与するのが、本来の目的だと思う。したがって、このページの原稿を書くたびに、ためらいや引け目を覚える。しかし、過去の書の特性は、むしろ人為を排除して自然に同化することにこそあった。ここに逃げ込もうとは思っていないが、書のそうしたアイデンティティは大切にしたいし、わたしにとってその体現は憧れでもある。

さて、小作ははじめハガキほどに裁断した画仙紙に三行、行四字を入れるつもりで一二枚書いたが、どことなく騒がしい気がして、

行二字の横長に変えてみようと思ひ、裁断済みの画仙紙をさらに半分に分断した。随分小さくなったが、試しに書いた一枚でしっくり入ったので、続けざまに心地よく五枚ほど書いた。図版はその最後の一枚で、出来たと思つて筆を擱いた。

行二字の横長に変えてからは、書くたびに線条が細くなった。最後の一枚にいたつては、筆毫一二本の先端だけがかるうじて紙に触れているといたつたところもあつて、わずかな筆触を頼りに筆を運んでいた。線条が細くなつていく自覚はあつたが、意図したわけではなく、自然の成り行きであつた。後からその理由を考えると、やはり詩句の趣が作用していたと思われる。

さて肝心の詩句は、北宋の魏野（九六〇〜一〇二〇）の五律「書逸人俞太中屋壁（逸人俞太中の屋壁に書す）」の頷聯である

洗硯魚呑墨 硯を洗えば 魚 墨を呑み

烹茶鶴避煙 茶を煮れば 鶴 煙を避く

この聯を知つたのは、呉昌碩の篆刻「且飲墨瀋一升」の印影を見た二十年近く前のことである。この印影が機となり、手を尽くして飲墨記事を収集しはじめていた時期にえた資料のひとつであつた。この詩では墨汁を飲むのは池の魚であるので、論文には反映しなかつたが、この聯は閑遠の趣が愉快で、ノートに綴つておいた。

近年、書作はもっぱら学生展の賛助出品のためであるので、経書、

中について論語を書くことが多くなつていた。加えて、詩を精読する機会が無くなつたことあつて、詩からは随分遠ざかつているが、カレンダー用の揮毫が詩との縁をかるうじて繋ぎとめてくれている。今回も昔のノートを繰つて、この聯に行き着いた。

筆は使い込んだものよりも新しいのが向くと思つて、若いころから幾度となく買い足してきた「極品宿純羊毫」（小楷だつたか中楷だつたか覚えていない）の比較的後年に買った一本を手にした。筆廠は上海工芸だつたように思うが、善連湖であつたかもしれない。墨は「抱雲」の磨墨液。紙は和画仙。印は畏友所刻の「雅」。印泥が詰まっていることに気づかず、鮮明を欠いてしまった。また、やや左下に寄つてしまつたのも悔やまれる。



5.5cm × 17.5cm

洗硯魚吞墨、烹茶鶴避煙。